

と妹夫婦二人して走って来ました。「よかったよかった。早うお入り。腹空いとんじゃろ。今急いで食い物作るきん！」と喜んで迎え入れてくれました。ありがたいものでした。

翌日はいよいよ故郷の久万町へ。バスは木炭車が走っています。バス停では沢山行列して待つており、「私の順番は今日中のことになろうか？」と心配して立っていました。丁度、久万から松山へ木材を積んだトラックが来ました。昔の仕事仲間が偶然私を発見、車を止めて「帰ったか。ここで待つておれ、帰り便に乗せて帰るから」とのことです。友達の親切で夕方には久万へ帰着。

一時間歩いてやっと我が家へ。昭和二十年十一月二十八日夜九時三十分頃でした。入団以来二年数カ月ぶりの帰宅です。しかも元気で。私の声を聞き付けて、先ず父が半信半疑で出て来るや、私の姿の上から下まで入念に見届けて「よう生きとった。もう死んだと諦めていた。何しろ葉書一枚届かんからのう」と固く抱き締めてくれました。後ろを向いて「兄が今元氣にも

んだぞ。皆早く出て来い」と大声で叫びます。数多くの妹や弟が皆飛び出して来ました。母は入浴中であつたとか。裸で走り寄って涙声で抱いて喜んでくれました。これが復員完結の瞬間です。今はその父母も亡くなりました。でも十一人の弟と妹等は全員元気で頑張っています。戦後久万の実家は三男の弟に任せ、私は松山市内へ移住し現在に至ります。

考えれば同年兵も沢山戦死したのに、私は生き残り、今日まで生かしてもらい、日本も戦後の貧困から現在の立派な国に復興して、毎日平和で繁栄の生活です。これ以上のことは贅沢で、今のままで感謝せねばならないと自分の心に言い聞かせております。

海軍第五十二警備隊

北方の守り

富山県 松島 米次郎

私たちが小学校に行く頃は、靴や鞆などではなく本

を風呂敷に包んで下駄履きでの通学でした。しかも足袋を履く者は金持ちの家で、大部分の者は寒くても裸足でいなければなりません。教室には火鉢が男女一個あてあり、小さくて弱い子は火鉢のそばに寄せませんでした。そのような環境で育った我々には、今の子どもたちの生活はもったいないように感じています。

父は「学校へ出て勉強しておけば一生涯にいつかは為になる時があるものだ。お前は末っ子だから学校を出ておかねばならない」と言われ、一年遅れながら農学校へ通わせてもらいました。

二十三歳で結婚、二年ぐらいで分家しなければならぬので、現地の田圃に家を建ててもらいました。男五人、女三人の子どもですから末子の私のことで父母の心配が多かったことと思います。以来、田圃一町一反を作ったり土方稼ぎにも行ったりしているうち、戦争がだんだんと厳しくなるにつれて若いものから順次召集令状がきて、やがて自分にも召集が来るものと覚悟していました。昭和十九年七月二十日頃やつぱり令状が届きました。部落では一家の主人としては初めて

でした。

海軍水兵として舞鶴海兵団へ入団で、自分のように年のいった者まで必要あるとは、戦況も非常に悪化している証拠だと思ひ、生きて帰ることは出来ないだろうと覚悟をしていました。どうせ戦場に行けば死ぬ身であるならば、最後に働いていかねば残った家族が困るだろうと思ひ、刈ってあった大麦を出発前に足踏み機で麦落とし作業を終わらせ、その日の晩に本家に行き、別れのお酒を戴きました。

翌朝、部落の人に見送られて村の八幡社に参拝、三日市駅まで大勢の人が日の丸の旗を振って「万歳！万歳！」で見送ってくれました。この時の最後の別れが、今でも時々目の前に浮かんできます。

軍港舞鶴に着いて最初は身体検査、注射等を受けましたが、次から次へと大変忙しくなり、家のことなど思ひ出す余裕もなく、まったく日の過ぎるのが早かったものです。毎日の日課として起床、点呼、消灯は時間正しく厳格であり、食事は麦飯でした。生まれて初めて銃の手入れや訓練など目まぐるしい一日でした。

た。

新兵だから食事の用意や後始末の食器洗いをしなければなりません。艦の中では水を節約し、少ない水で沢山の食器や洗濯物を洗わなくてはなりません。少しの水で多くの物をいかに洗うかが問題で、時間を限定して断水されるので苦しいんです。古兵が真っ先に使った残りの水で自分等が洗うのですが、布巾を濡らして食器をふくだけの時が度々ありました。それを各班ごとに網袋に入れて消毒場へ運んで行きます。時間が限定されているので、その時間を厳守しなければならぬのです。

食事以外に飲む水はなく、手洗い場で水を飲むのを見られると大変で罰せられました。その時は自分一人だけでなく班の者全員が制裁を受けます。同期兵以外の兵に見られぬ間に水を飲みましたが、暑い日が続くので、水と食い物には飢餓のようでした。そのため身体は日増しにやせていきました。

食事は各班ごとに決めてあり、当番も順番に回ってきました。上司の分は沢山盛りつけなくてはなりません。

ん。少ないときは「今日の当番は誰だ」と怒鳴られるので、皆食事当番になったら上司の分を多く盛り、自分の分は少なくなるのですが仕方がありません。寝ても覚めても「食いたい、食いたい」の一念でした。そのためか誰も彼もがだんだんと身体が弱ってしまい、ある者は残飯の中の物を拾って食べていたと聞きました。

ハンモックに速く上ったり下りたりりの練習を数十回するので、汗は滝のように流れるし、下着は絞れるほどびしょ濡れます。その苦しみは体験者でなければ判らないでしょう。短期間の訓練兵ですから、次から次と習うことが多く、海に出てボートを漕ぐ練習に行き、生まれて初めて海を見た人も大勢いました。ボート一隻に十二人ぐらいで両方に並び、櫂で水をかき、ボートを漕ぎます。数十隻で競うこともあり、一番ビリの組は、その日の昼食が欠食となるので皆必死にボートを漕いだものです。

また、武装して早く整列する訓練もやりました。各班競争で、負けた班は罰として上司の訓示を聞かなく

てはなりません。「お前等は、娑婆のことを思っているのか、立派な軍人になっていないとは恥ずかしいことだ！ 残してきた親や子供、妻もいるだろうが、気が抜けているからだ……今、気合を入れてやるから歯を食いしばれ」と言われます。歯を食いしばらないと口が切れるからです。並んだ順に頬を殴りつけられるのですが、身体が動くとき再び殴られます。このよう

なことが、二三日に一度必ず実行されるので、誰もが両頬がはれあがっていました。頬が赤黒くなった者、耳が黒くなった者がいます。まるで畜生同様に扱われ情け容赦は絶対ありません。「命令だ」ばかりです。で、「全員死ね」と言われたときの死の覚悟ができていきました。自分は百姓男だから体力は他の人に負けなかったのですが、商人、僧侶の人は身体が弱いので耐えることが大変だったことでしょう。人格者も医者も新兵ですから苦労の日々を送り、約一カ月が過ぎました。

今度は衣服等、新品が次々と配給され、それに自分の兵籍番号を記入、更に衣類を入れる衣袋に全部収

納しておきます。海軍帽子、黒服、白服、礼服、地下足袋、手袋等々が支給されました。

一カ月後、外出が許され町に出ると、そこも兵士が多く、自分等新兵は誰を見ても先輩ばかり、四方八方いつも敬礼ばかりしなければならず、外出は楽しくなかったものです。

いよいよ近日中に戦地へ出発するからということで、家族との面会が許され、面会室に行くとき待っていてくれました。本家の兄に連れられて、妻と娘の光子とまさ子とで弁当を持ってきてくれ、おはぎなど沢山食べ、とても美味しく、これがこの世の終わりであろうと思えました。しかし自分の苦しみは多く語らなかつたし、皆に心配してもらっても自分のためにならないと思つたものです。今思えば、特別な話をした記憶もないままの別れ、これが妻子との別れであると覚悟をしました。面会時間は僅か一時間で終わってしまいました。

数日後に海兵団を出発することになり、北方の陸戦

隊だと伝えられました。出発の日、広場に人々や兵隊が並んで、音楽隊の演奏により勇ましく見送ってくれました。貨物列車に乗せられ京都経由で東京駅で乗り換えました。列車は三等車で窓には黒幕が張られ、外は全然見えず窓を開けることも禁止されており、車内には憲兵が歩き回っているし、列車がどこを走っているのか全く分かりませんでした。

青森から函館の旅館で一泊、次の日は「白洋丸」という軍用船に乗るのです。何百人か判りませんが大勢の軍人でごったがえしていました。船中では訓練はありませんが、精神面の訓練があり、軍人勅諭等も暗記させられました。時々整列の号令がかかり「お前達は、この頃気合が抜けているぞ！ 気合と活を入れてやるから両手を高く上げろ！ 足を開いておれ！」と丸太ん棒で叩かれます。それは痛いこと痛いこと、頭の上までジーンとなります。そのために尻から足の後ろ下半身は真っ黒になりました。そんなことをすれば全員倒れてしまうと思いますが、当時は皆精神が統一されていたから、一人として倒れる者はいませんでした。

た。

軍隊では、一日でも早く入隊した者が上級者ですから、訓練をつけるのは若僧で、二十歳前の小僧が私のような三十八歳の兵隊を制裁するのです。上官の命令は「朕の命令」、即ち「天皇の命令だ」と言ってピシピシと叩くのです。何事も仕方なしでした。

一週間が過ぎ、水平線に島のようなものが浮かんできました。「目的地に着いたぞ！」と言われました。

千島列島の北端、占守島に上陸しました。

我々の部隊名は「第五十二警備隊」であり上風陸戦隊、第二分隊速射砲隊で、速射砲一門。隊長は村山兵曹で次に保坂水兵長、蛸井兵長でした。二人ともキスカ島の生き残りで気性は荒く、下の者達は皆困っていました。我々は本当に苦しめられました。年齢は十六歳でしたから私とは親子ほどの差がありました。いつも鬼を見る思いで、今でも兵隊の当時のことが目に浮かんできます。

上陸当時は寒さが厳しく、四月末頃から暖かい気候になりました。日本から昆布、鮭、鱈、鱒等を沢山取

りに行っていた島ですから、大きい倉庫が建ててありました。倉庫には塩鱒が積み込んであるので、上陸してから毎日塩鱒の煮たのを食べていました。海岸には昆布が打ち上げられて堤防のようになっており、我々は新しい昆布を拾って空缶で煮て食べていました。

島には地下発電所があり非常に助かりました。兵舎といっても、廊下のように長い建物で、地面を掘った上には屋根に少し土を乗せ草原のようにしてあります。内部はストーブの火で暖かくなります。燃料の薪を作るのに木を切り取る作業をするのですが、島には上に伸びる木は一本も無くほとんど一葉枝の木ばかりでした。一面に生い茂ったその木は、何百年(？)もたった古木ですから堅く、太さは腕くらいもあって長い時間燃えていました。

舞鶴にいた時、戦地に行けば少し良いと聞いていたのですが、食糧はやはり少なく、食うことに関しては飢餓のようなものでした。身体は衰えて、弱い者は栄養失調になる者も多かったのですが、自分は百姓育ちですから皆より我慢が出来ましたし、時々は菓子や

団子、ようかん等も配給がありとても嬉しく思いました。煙草は充分もらえるので三十八歳にして煙草を吸うことを習いました。それが今になっても止められずまだ続いているのには困ったものです。

戦地は大変に厳しく苦しいものでした。今度は速射砲隊ですから訓練はきつく、その操作も大変でした。また敵が上陸して来た場合には、爆雷を身につけて敵戦車の下にもぐり自爆する覚悟で飛び込む練習をし、勇士になる精神力をつける鍛錬もありました。生き延びることや、世の中のことを思ったり考えたりしたことは無く、ただその時だけの毎日でした。

晩には、必ず整列の声が掛かり「お前等は気合が抜けている！ 気合を入れてやる」からと、頬を殴られたり、尻を打たれました。お尻から下股の方まで真っ黒になり、なにしろ、入団以来毎晩のことですから、お風呂に入ると戦友同士で黒くなっていく程度をお互い見せ合っていました。叩かれて倒れる者がいたら再び打ち直され、不動の姿勢が出来るまでやらされました。上司でも各人の気性で情け深い人もおられ、その

人には今でも感謝しています。

敵は、毎朝八時頃二、三機の飛行編隊で爆撃をしていきます。カムチャツカから来て千島を回って行くのが日課でした。時に海の向こうに連合軍の軍艦が見えます。時折友軍機が飛び立ち応戦しますが、日本の飛行場には飛行機が二、三機しかありませんでした。この島は千島列島の最北端ですから、ものすごく厳しかったのです。

十一月頃から雪が降り、積雪は少ないのですが時々突風が吹いてきます。風速は三十〜四十メートルで寒気は零下三十〜四十度までになり、その時は眉毛はピチピチに凍ります。四十メートルの風では人は立ってられません。そんな時各班の食事当番は、皆揃って一本のロープを握り並んで行きます。距離にすれば三十〜四十メートルぐらいの近い距離でしたが一人歩きは危険です。外出時は帽子の上防寒帽を必ず着け、天候の悪い日はその上にまた白衣を着ました。

海面は寒さで凍結して、十二月末から三月初め頃まで船は来ず連絡は飛行機でした。貨物の輸送はありません。

せん。兵士はこの島に何千人いるのか全くわかりません。第一線戦地ですから、お盆もお正月も休みはありません。その間慰問袋は一応もらった記憶があります。

ある晩「松島君！ 手紙だ」と言って渡され、開封してみると、皆元気だとの内容で、次には子供が生まれたと書いてあり、男の子でした。名付けは本家の松島治作さんだとのことで「晴夫」と名付けたと書いてあり、とても嬉しく思いました。そして、「最後の別れ子か」とも思いました。その手紙を何度も何度も繰り返し繰り返し読み返したものです。しかし、生まれた子供を見ることが出来ぬことは苦しいことでした。

このような時、一人の同年兵が銃弾一発を紛失し、班長にピシピシ打たれる体罰が加えられました。そのためか四日目の朝死亡しました。私はお経を読めたので戦友と二人で茶毘に付しましたが他の人は誰も知りませんでした。私は、万が一生きて帰ったら遺族の人に話してあげようと思いつつ、一生懸命読経しました。こんなことがあったので、皆注意に注意を加えな

がら、今日も明日も、速射砲の訓練をしました。また戦車の下に爆雷を持って飛び込み自爆する練習もしました。

寒さが酷くなり零下三十度が普通である冬がやってきました。自分は右手中指が凍傷になり、二週間ぐらい入院しました。その二週間の食事ではこちらに来て初めて満腹を感じました。退院すれば直ぐ訓練です。

この軍隊の生活で上司と下級者との差は天と地ほどもありましたが、訓練中は良いのですが、いざ敵と交戦するときになったら、上下一丸となって心を一つにして戦わなければなりません。そのためにも、平常から上下仲良くしておかないと勝ちぬくことは出来ないと思いました。

四月頃になり、海の氷も無くなり船が通れるようになり、内地の状況も聞けるようになりました。でもだんだんと戦況は悪化していくようでした。カムチャツカから敵機が毎日来ます。しかも、次第に多くの編隊で十機も重ねて銃爆撃してきます。友軍機は、二機

ぐらいで応戦するだけで心細い限りでした。

六月末頃の静かな晩に、急に非常召集で、陸戦隊全部と海軍兵の整列集合の命令が発令されました。何事かと武装整列して点呼を待ちました。陸戦隊司令が来て「いよいよ戦争は悪化してきたので、君等に本土決戦の任務命令があった。一時間でも早く本土に到着し決戦にあたるから準備をし全員乗船せよ」との命令が伝達されました。それからは大変忙しくて寝る時間もなく、自分の物は総て衣類袋に入れました。また兵器を運ぶ準備等や後始末に一生懸命でした。

連絡船から本船「白山丸」に、夕方どうにか全員乗船出来ました。下部に荷物を積み、上部の大広間に兵士がぎっしり入り込みました。同じような船が三隻で、北海道陸軍兵用が二隻あり、夕方出発した汽船は速度が速く航海をし続けました。翌日の朝、上甲板に上り見渡すと四方海で何一つ見えるものはありません。二日目の晩十時頃だったと思いますが、船がピリッピリッと破れたような音響がし、何事かと、誰も彼も一同上甲板に上がっていききました。電気は消えるし大

変でした。上には縄で作った大きいはしご（ラッタ）で登ります。それに何十人もがぶら下がり、まるで蟻のように次から次からどんどん登って、やれやれと見ると、遠くの海上二カ所に火花かと思われるような、赤、青の火が燃え上がっています。大惨事です、敵の潜水艦から魚雷が発射され、陸軍兵の船にあたり二隻とも一瞬に沈没したのです。その時恐らく何千人かの兵士が亡くなったのですが、自分等の船は助かりました。

護衛船が付き添っていましたが、今度は進路を変えて、数日間ぐるぐる回りながら航海を続けました。敵の潜水艦が追いかけて、我々の船を狙っているらしかったのです。八日目頃によく遠くに陸地が見えてきました。北海道です。敵はここまで来ましたが海が大波になり、やっと敵潜水艦は見えなくなりました。

三隻の輸送船のうち我々の一隻だけが、青森県大湊の要港に到着しました。上陸、即時にトラックに乗せられ杉林の山の中に到着しました。私は海軍水兵でし

たが、遂に一度も軍艦に乗れませんでした。しかし、海の上で一度命拾いをしたことになりました。

七月の山中で杉を切り倒し、それを並べて上に板を敷き天幕を張って一休みしましたが、真夜中であり、明かりが外に出ぬようにローソクをとぼしました。敵機の来襲に備えて天幕は分散して配備につかなければなりません。夜が明ければ敵機の来襲です。時々不発弾も落ちてきます。ある日、一年ぶりで飯盒でたいた御飯に舌鼓をうったことがあります。米の量が少ないので満足というわけにはいきませんでした。野山の太いフキが副食だったり、主食の足しにしましたが、塩が無いので海岸へ出て海水を汲み味付けをしています。

週間に一度、トラックに乗る使役に出るのですが、荷物の中に入っていた玉葱をそっと取って食べる時、それはそれは美味しいものでした。のどが渴いた時飲む水よりもうまいし、今林檎を食べるよりもっとおいしいものでした。持つて帰ることは出来ないの

で、車上で三個も食べて満足した記憶があります。

七月になって、朝鮮人の青年で十六歳の新兵が配属されました。一年ぶりの新兵です。銃は持っておらず、戦友同士で使用せよとのことで、自分は大変よくしてやったものです。とくに新兵の時上司に苦しめられた経験があるので、何でも手伝ってやると言ったのですが「よいです」と言っただけの回りのことは自分でやっていました。「身体を大切にしなさい」と言っただけで、優しく労ってやったものです。

軍隊は一家族のような日々を過ごし、戦いに勝ちぬくためには上下一心同体にならなくてはならないと思うのですが、当時私のいた隊は全く心は一致していませんでした。訓練は厳しくても、それ以外は苦楽を共にしなければ、いざという時に心が合わない、と戦友は皆思っていたのです。しかし、その時の隊は世の地獄であり、上司は天に昇った気持ちでいたのでしょうか。私も古参になり案に暮らしたのは二週間くらいで、訓練もなく身の回りの整頓や洗濯などをし、八月十日も過ぎ、皆で「もうお盆だね」とか雑談をしてい

ました。

八月二十日の朝になり「戦争は負けた」と聞いたのですが、信じられませんでした。そして、上官から、早く自分の持ち物を用意して家に帰るように言われ、準備に大わらわで、さらに書物は全部燃やし、毛布や服等は要るものと不要な物を区分するようにとのことでした。私等は持って帰れる物は食物、パン、煙草、水筒、飯盒程度のもので、お金は全然持っていませんでした。速射砲、銃剣等はその場に置いてきました。なにしろ敵が上陸してくるから早く行けと再三言われ、追いたてられる思いで駅に行き大変混雑していた汽車に乗り込みました。どこの駅から乗ったか記憶は全く無いし、無一文で帰ったのですから、何日かけて帰ったのかよくわかりません。その時、同乗した戦友は一人もいませんでした。

八月二十八日の晚七時頃、JR黒部線の三江市駅に着きました。そこで、下り列車に友人の松島延吉さんが乗っているのを見つけました。車中一般の人や兵隊

は「戦争に負けたので敵が今にも上陸してきて、男女を別れ別れにして、子供をも連れ去る」とか、寂しいことを小声で口々に話し合つて、いかにも不安であつたものです。

私も、一刻も早く家族の顔を見ることを祈つていましたが、どうせ、家族一緒に暮らすことは出来ぬだろうと覚悟を決め、急いで家へと向かいました。道々「戦争に負けたのだから大変なことになるぞ」と延吉さんは言われて、何度も何度も「恥ずかしいことだ」とも言っていました。しかし、自分はそうは思いませんでした。何故ならば、自分は非常に苦しいことに出遭つてきたから、地獄から極楽の世界へ戻つたような思いであつたのです。

家に着いたのは八時過ぎでした。早速本家へ知らせに行つて親たちと対面し、帰つてきたと実感して、「良かった！良かった！」と語り合いました。やつと一般人になつて世の中に出たような気持ちになりました。そして一夜明けましたが、負けた戦争なので誰も訪ねて来てくれる者はいませんでした。

家では、私が出征中のことを聞いたり、語り合つたりして、お互いの苦労は消え去つたような気持ちになりました。短い期間でありましたが、最悪の苦労をしていたから、どんなに辛いことでも苦しいことにも耐えることが出来るような心身になりました。あまり欲も無くて、何よりも健康が第一と思うようになりました。

その後、農業をしたり、砂、砂利、玉石等の採集をしたり、土木出張所の事務や巡視員などし、定年まで勤務し、現在は気楽に暮らす身分になっています。

【解 説】

☆海軍第五十二警備隊

海軍恩給加算調査による部隊略歴

昭和一六・一二・八ヨリ マーシャル群島

戦地戦務 加算三月

(昭和一六・九・一編成

同一六・一一・二 タロア着)

昭和一七・四・一ヨリ 同四・一〇

戦務甲 加算三月

(昭和一七・四・一〇 第六十三警備隊ニ改編)

昭和一九・二・一ヨリ 同一〇・三 マデ

内地 戦務丁 一月

(昭和一九・二・一 再編成)

昭和一九・一〇・四ヨリ 二〇・七・一〇

終期 幌筵島 戦務乙 二月

昭和二〇・七・上旬マデニ大湊着

(昭和二〇・七・一〇 解散)

大湊警聯特別陸戦隊ニ編入)

☆大湊聯合特別陸戦隊

昭和二〇・七・一〇ヨリ 同 九・二 終期

内地 戦務丁 一月

(昭和二〇・七・一〇 編成)

☆海軍警備隊

鎮守府・警備府または艦隊に所属し、その管轄地区内の防衛と警備に任じ必要に応じ港務・通信などの業

務を分掌する陸上部隊をいう。その所在地名または番号を冠称し所要の艦船・防空隊・特設艦船などを附属させていた。

☆大湊聯合特別陸戦隊

海軍特別陸戦隊は、海軍大臣または艦隊長官指定の地に派遣し、その派遣された地域の警備、防衛に任じ、または上陸戦闘・要地の占領などに任ずる海軍の陸戦部隊で、所在地またはその陸戦隊と編成した鎮守府名・番号を冠した。

「聯合特別陸戦隊」は鎮守府特別陸戦隊二隊以上またはその一隊と防空隊などを組み合わせて編成された。

海軍の陸上警備は、陸戦には陸戦隊があるが横須賀鎮守府特別陸戦隊は一五隊、呉鎮守府特別陸戦隊は一隊、佐世保鎮守府特別陸戦隊は一六隊、舞鶴鎮守府特別陸戦隊は六隊、大湊警備府特別陸戦隊は三隊、鎮海特別陸戦隊は二隊、ほかに上海海軍特別陸戦隊、第四艦隊特別陸戦隊各一隊。

警備隊は、第一警備隊（第百十警備隊（六十八隊）及び地名を冠した警備隊（五十一隊）中国八、島嶼七、他三六）の計一一九隊。港湾警備隊（地名を冠す）二七隊、防備隊二八隊である。

占守島は千島列島最北端、カムチャツカ半島に接した島であり、アツツ島玉砕、キスカ島海軍守備隊は撤退したが、文字通りの日本北端の護りの地であった。北千島は、徳川時代、日本領とされていた樺太と条約により交換したもので、純然たる日本領土であった。

しかし、ソ連軍は終戦後の昭和二十年八月十八日、占守島に奇襲上陸した。日本軍占守所在部隊は、来攻のソ連軍を反撃し、ソ連艦船に多大の損害を与えた。しかし、日本軍は命により十六時戦闘を中止した。

八月十八日、日本軍は北千島の戦闘行動を停止した。また、参謀総長は、第五方面軍（北方軍）に局地停戦交渉と武器引き渡し等を指示した。

その後、ソ連軍は樺太に上陸し、我が軍使をソ連歩哨が荒貝付近で射殺するという事件が起きている。

吾れ戦艦「武蔵」に乗艦せり

埼玉県 笠原 安雄

徴兵検査前の家族構成等について

私の家族は両親と兄妹七人の九人家族でした。上から男四人、女二人、第一人、皆二歳違いでした。家業は農林業で山林が五十町歩、田畑一町五反歩、世間的にみれば裕福の部に入りますが、昭和初期の不況のため裕福とは程遠いものでした。

小学校から県立粕壁中学（当時県下中学は七校）に入りました。勉強は好きでしたが経済的事情で中退の止むなきにいたり、今でも当時を偲び後悔しています。海軍志願にも挑戦しましたが体格検査で不合格でした。そして岡山市の秩父織物卸小売店の店員となりました。当時青年学校というのがあり、軍事教練が主で仕事が終わるといつも駆け足で学校に通いました。主に一般産業の子弟は軍事産業の会社に徴用されまし